



News Letter

日本列島社会の歴史とジェンダー

2016.7.1.

日増しに蒸し暑くなり、梅雨明けの待ち遠しい季節となりましたが、皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。この度、歴博基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の始動にともない、ニューズレターをお届けする運びとなりました。第1号は、先の5月7日（土）、8日（日）両日に渡って開催されました、第1回研究会についてご報告いたします。今後もこのような形で定期的にお届けしていく所存ですので、どうぞよろしく願いいたします。

「日本列島社会の歴史とジェンダー」研究会の発足にあたって

ゴールデンウィークの頃、歴博は若緑の息吹に包まれて、一年でもっとも美しい季節を迎えます。その緑に包まれて、5月7日、新しい基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の第1回研究会がスタートしました。

日本での歴史研究にジェンダー概念が本格的に導入されてから、すでに四半世紀が過ぎようとしています。この間に、社会学、法学、文学をはじめ多方面でジェンダーに基づく探求がなされ、歴史学においても、ジェンダー史研究はさまざまな成果を挙げてきました。しかし、日本史学、民俗学、考古学にもとづいて日本列島社会の実像を実証的に解明し、その研究成果を広く国内外に向けて展示することを使命とする歴博において、これまでジェンダーの視点からの歴史研究や展示は行われてきませんでした。この共同研究では、これまでの歴史学・民俗学・考古学などの成果に学びつつ、その時代像・社会像をジェンダーの視点からいかに更新しうるのかを実証的に探究し、ジェンダーからみた歴史展示を見据えて、その基盤となる研究推進をめざします。

「日本列島社会の歴史とジェンダー」というテーマは、ジェンダーに基づく日本列島社会の通史の探求といった響きを持っています。しかし、本研究は、必ずしも直接に本格的なジェンダー通史を描くことをめざすものではありません。むしろ、これまでの具体的な歴史研究の成果にジェンダー視点を持ち込むことで、どのように新たな地平が拓かれるのだろうか。それを、それぞれの時代の研究者が、自分の持ち場で実験したら、どんな魅力的な結果が生まれるのだろうか、という素朴な関心からスタートする試みなのです。実験は、A文字／文体とジェンダー、B衣料生産／流通におけるジェンダー、Cセクシャリティ発現の場、D社会集団とジェンダー、の4つの分野／方法に絞って行いますが、それでも、テーマの大きさ・広がりからみれば、3年間という期間は決して十分な時間ではありません。しかし、厳しい実証的検討に耐え、反証可能性を十分に考慮した実験をおこなうことができれば、それは、将来の豊かな歴史像の創出につながっていくことでしょう。

この共同研究の成果が、タンポポの綿毛のように、それぞれの時代・分野において深く根をはっていくことを願って、楽しく研究会を進めていきたいと思っております。みなさまのご協力を心よりお願いする次第です。

横山百合子（国立歴史民俗博物館）

研究会報告

歴博基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の第1回目となる研究会を、下記の要領にて開催いたしました。以下に2日間の概要および松沢裕作氏、廣川和花氏の参加記を掲載いたします。

歴博基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」第1回研究会

2016年5月7日（土）－8日（日）

於：国立歴史民俗博物館 第1会議室

研究会メンバー ※◎研究代表、○副代表

松本直子（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

東村純子（福井大学教育地域科学部）

義江明子（帝京大学文学部名誉教授）

伴瀬明美（東京大学史料編纂所）

辻浩和（川村学園女子大学文学部）

久留島典子（東京大学史料編纂所）

福田千鶴（九州大学基幹教育院）

村和明（公益財団法人三井文庫）

柳谷慶子（東北学院大学文学部）

森下徹（山口大学教育学部）

田村均（埼玉大学経済学部）

松沢裕作（慶應義塾大学経済学部）

廣川和花（専修大学文学部）

長志珠絵（神戸大学大学院国際文化学研究科）

加藤千香子（横浜国立大学教育人間科学部）

水野僚子（日本女子大学人間社会学部）

池田忍（千葉大学文学部）

仁藤敦史（国立歴史民俗博物館）

○三上喜孝（国立歴史民俗博物館）

小島道裕（国立歴史民俗博物館）

澤田和人（国立歴史民俗博物館）

◎横山百合子（国立歴史民俗博物館）

関沢まゆみ（国立歴史民俗博物館）

5月7日（土）

午前中は歴博総合展示1室（原始・古代）の自由見学を実施。1室は5月9日からリニューアルに向けた閉室を控えており、閉室前に時間をかけて見学する最後の機会となりました。午後からは横山百合子氏による研究会の説明をふまえ、研究会メンバー各位より自己紹介および本研究会における問題関心についてひと言ずついただきました。その後『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』について報告と討論を実施。久留島典子・義江明子・長志珠絵・横山百合子の各氏の報告を受け、討論が行われました。

日本列島社会の歴史とジェンダー（横山百合子）

本研究の2つの目的

1. ジェンダーをふまえた日本列島社会の歴史の実態の実証的解明
2. “日本列島社会の歴史とジェンダー”をテーマとする展示（2020年春を予定）の基盤構築

↓

ジェンダー視点からの時代像・社会像の更新とその社会的発信

国内外の研究・展示の状況

- 国内博物館・美術館のジェンダーへの関心
 - 散発的な試み
 - 既存のジェンダー規範の強化
- 海外の博物館
 - ドイツ歴史博物館2015秋展示「HOMO-SEXUALITAT_EN」
 - 大英博物館 ジェンダーの常設・企画展示
 - 2012 IAWM(International Association of women's Museum)設立

本研究の課題

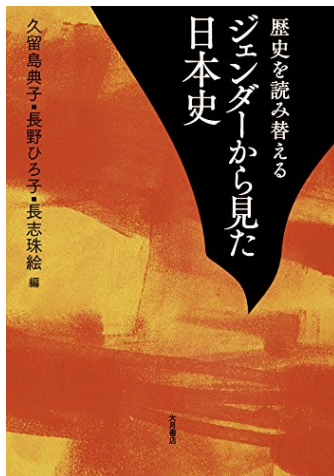
- 時代・分野横断的な総合的研究
- 細分化された既存の歴史学研究的到達点と切り結ぶ、具体的な成果の提示

→ 分野別（政治・経済・文化etc）、時代別（古代～現代）の組み合わせという方法はとらない。

研究の特色と意義

- 既存の諸研究とジェンダー研究が乖離しがちな現状の克服
 - ⇒ 研究の総合的性格の向上
- 専門、年齢、性別、ジェンダー概念へのスタンス等の点で多様性のある研究員構成と外国人研究者の積極的参加
 - ⇒ 参加者相互の知的刺激、学際的な研究推進への寄与。
- 研究者コミュニティに加え、市民、学生・院生へのジェンダー史研究の成果発信を重視
 - ⇒ 歴博の大学教育への貢献

『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』（大月書店、2015）を読む



現行の高校日本史教科書に沿った構成がとられる副読本的な位置付けの本書が提示し得た見地と課題について、編集・執筆者の側から久留島典子（中世）・義江明子（古代）・長志珠絵（近現代）の各氏から、また横山百合子氏からは近世部分を中心に読み手側の視点から、報告が行われました。編集・執筆陣の課題として、「読み替える」前提となる日本史像とは何か、「読み替える」ことにどこまで成功しているか、一国的な観点を抜け出せていない点、対となる『歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史』（大月書店、2014）との不整合性、家父長制の概念など日本史編としての時代イメージのすり合わせ不足など様々な点が挙げられるとともに、これらの報告を受け「家父長制」概念のブレや「通史概念」「時代区分」という前提自体がはらむ問題、本書が活用される場や対象読者の問題など、活発な議論が交わされました。

『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』（大月書店、2015）目次

序章 ジェンダー史研究の展開と本書の試み	第6章 中世社会の成立と文化
第1章 ジェンダー史の射程から見た日本の課題	第7章 幕藩体制の確立と庶民文化
第2章 原始社会の生活と文化	第8章 近代国家の成立
第3章 農耕の普及と社会の変化	第9章 二つの世界大戦と日本
第4章 律令国家の形成	第10章 現代日本と世界
第5章 貴族政治と国風文化の発達	

5月8日(日)

2日目はリニューアルを控えた歴博総合展示1室(原始・古代)について、「ジェンダー視点からみた歴博1室総合展示の到達点と課題」と題し、松本直子氏、清家章氏に報告をいただき、両氏の報告をふまえた討論がなされました。また、この日は冒頭で東村純子氏による原始機の実演も行われました。

原始機復元実演 東村純子(福井大学)

古代の紡織研究者である東村純子氏に原始機による機織を実演していただきました。



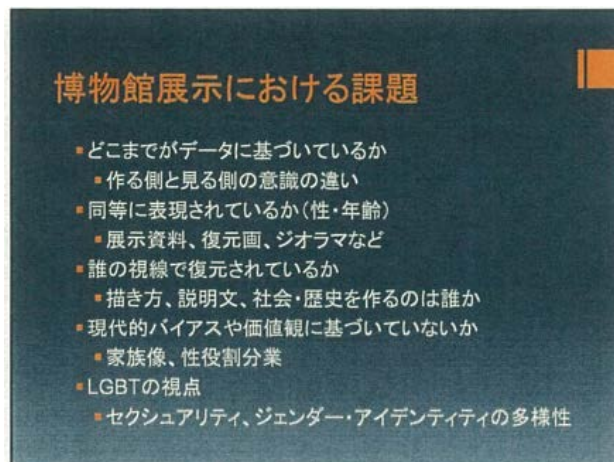
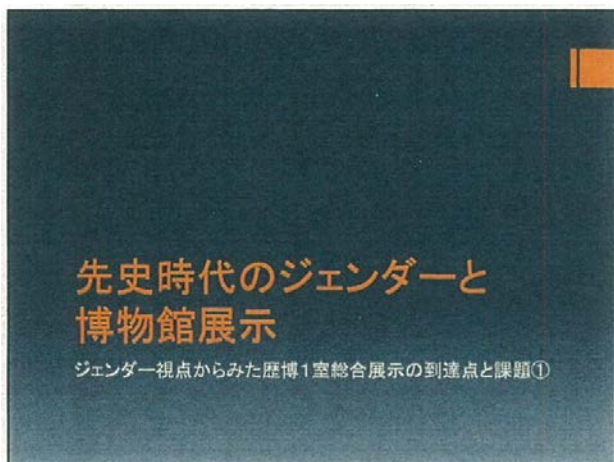
ジェンダー視点からみた歴博1室総合展示の到達点と課題

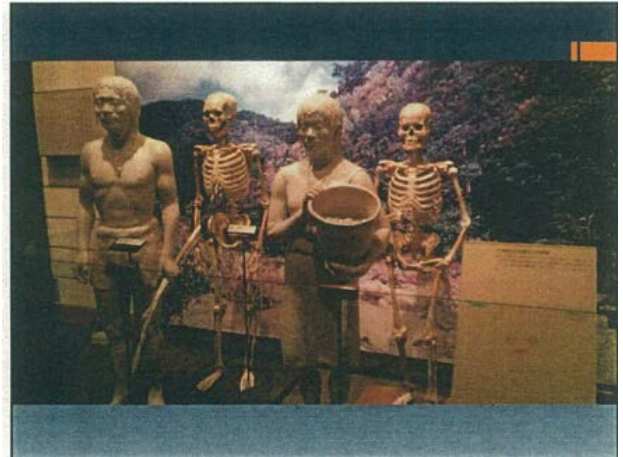
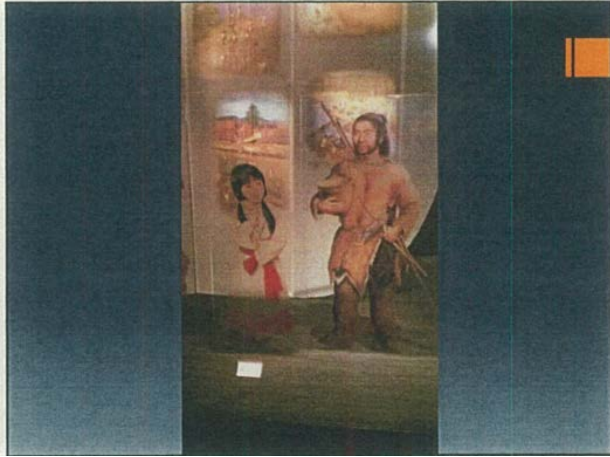
歴博1室総合展示(原始・古代)のリニューアルにあたり、現在の1室の到達点および今後に向けた課題について、松本直子氏(岡山大学)、清家章氏(岡山大学)両名のご報告の骨子を紹介します。

報告1

先史時代のジェンダーと博物館展示

松本直子(岡山大学)





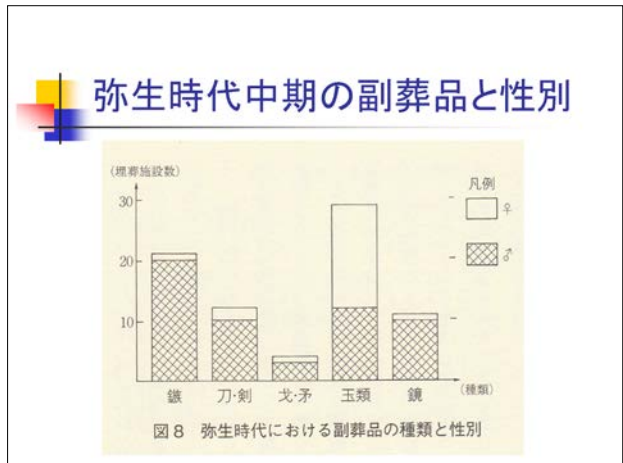
報告 2

弥生時代から古墳時代の女性首長

清家章 (岡山大学)

弥生時代から古墳時代の女性首長

国立歴史民俗博物館共同研究会
2016. 05. 08
清家 章



女性首長は一般的存在である。

- 邪馬台国もヤマト政権においても、王位と天皇位は父系(男性)継承が基本。
- 女王と女性天皇は基本的に中継ぎである。

↑↓

- 女性首長は子供を出産しうる
- 女性首長は一般的存在である。

女性首長出現の背景

- 弥生時代後期後半～古墳時代前期は戦争・軍事的緊張が低下か？
- 神仙思想に基づく祭祀の重要性
- 祭祀は女性も男性も担う
- 弥生時代中期以来、女性の地位は高い。

↓

- 女性首長の存在に不都合はない。

参加記 1

歴博基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の第1回研究会は、二つの研究成果物の評価が柱となったように思われる。第一の成果物は、研究会二日目の5月8日を最後にいったん閉鎖され、リニューアル期間に入る歴史博総合展示第1室（原始・古代）の展示であり、第二の成果物は、久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵編『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』（大月書店、2015年）である。

前者、歴博総合展示第1室については、まず研究会第一日目の午前中に、参加者による見学が行なわれた。すでに一定の年月を経てきた展示に対し、研究会メンバーがジェンダー的観点からの問題を指摘する形で見学は進められた。

展示を解説つきで見る、ということは、しばしば展示担当者の説明をききながらその展示の趣旨をよりよく理解する、という形で行われることが多い。しかし、第三者が、研究会中の三上喜孝氏の表現を借りれば「つっこみを入れながら展示を見る」という展示見学は、考古学・古代史学にも、ジェンダー的観点からの研究にも疎い私には、興味深い経験であった。

この点をより深める形で、研究会二日目には松本直子氏と清家章氏による報告によって、原始・古代の展示におけるジェンダーバイアスの問題が議論された。松本氏はジェンダー考古学の視点から、清家氏は古代の女性首長の存在から、それぞれ博物館展示における性別役割分業の表象について問題提起をおこない、これも門外漢の私にはひたすら勉強になったという他ないものであったが、議論はジェンダーの問題からさらに広がり、博物館展示における復元の問題、復元の提示の仕方の問題、復元されたジオラマや模型を見る側のリテラシーの問題に及んだ。

研究会第一日目の午後におこなわれた、もう一つの成果物、『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』をめぐる討論では、同書の編集、執筆にかかわった久留島典子氏、義江明子氏、長志珠絵氏と、主として近世部分に関して横山百合子氏によるコメントがなされ、それにつづいて質疑応答がおこなわれた。歴博総合展示第一室が、いわば、従来の歴史研究に沿った歴史記述であるとすれば、『ジェンダーから見た日本史』は、戦略的に、従来の歴史記述の枠組みにあえてのつた上で（具体的には、高校日本史教科書の章立てにほぼ準拠する）ジェンダー観点を提出しようとした試みである。それだけに、むしろ従来の歴史記述のもつ問題性が、ジェンダー観点と直接に関連しない部分でもあぶりだされる要素があり、たとえば従来型時代区分によって生じる各時代の像の不整合や「家父長制」「近代家族」などキーとなる概念の揺れなどが俎上にのぼった。

両者を通底する問題は、ジェンダー的観点を歴史記述に導入すること、あるいはジェンダー主流化といったことが、単に（展示を含めた）歴史記述の内容にジェンダー的観点を組み込むことにとどまるのではなく、従来の歴史記述がもつ内部的矛盾や、歴史記述の従来の形式が抱えている問題性一般を射程におさめねばならない、あるいはそうした問題性を浮き彫りにする性格をもっている、ということであったと思う。横山氏は研究代表者としての共同研究趣旨説明のなかで、ジェンダー史研究が、「細分化された既存の歴史学研究の到達点と切り結ぶ」必要を述べられたが、こうした必要性は、この二つの成果物の検討を通じて得心がいった、というのが私自身の率直な感想である。ジェンダー観点を導入した「新しい歴史記述」と対峙して、ジェンダー観点を欠落させた牢固たる、大文字・単数の「従来の歴史記述」が存在するというのはおそらく空中楼阁で、「従来の歴史記述」もまた、個別に分散して相互に矛盾を孕んだ存在なのであり、ジェンダー観pointsの導入はそうした「従来の歴史記述」の内部矛盾とかわりあって提起されることによって、より説得的な新しい歴史記述を生み出すことができるのであろう。異なる時期と分野を専門とする研究者の共同研究として本研究が組織されていることの意義もそこにあるものと、私は理解した（より正直に言えば、私のようなこれまでジェンダー観点からの研究の実績を持たない研究者が、こうした共同研究に参加することの意義を理解した）。

抽象的な感想になってしまったが、もう一点、本研究会のハイライトとなったのは、東村純子氏による原始機織復元の実演であった。多様な専門を持つ研究者による本共同研究の可能性を感じさせる一コ

マであった。

松沢裕作（慶應義塾大学経済学部）

参加記 2

今回は本共同研究の最初の研究会ということで、2日間の日程で、横山百合子研究代表の趣旨説明、メンバーの顔合わせ、展示見学、研究報告、そして討論と、盛り沢山の内容となった。この共同研究は、既存の研究グループを発展させる形で組織されたというよりは、研究目的のもとに研究代表者が選び出した多彩なメンバーがはじめて顔を合わせるという趣であるが、それゆえに、この最初の研究会で、研究報告だけではない企画を通して意見交換ができたことは効果的であったと思う。筆者は過去に展示を職務の一部としていた経験があり、展示とジェンダー史を関わらせた報告や議論を特に興味深く伺った。そこで、ここでは「ジェンダー史の観点からみた展示」の論点について雑感を述べたい。

リニューアル前の総合展示（古代）の見学ができたことは思わぬ（？）収穫だった。歴博の広大な常設展示を細部までじっくり見てまわる機会は、歴史研究者にとってもそれほど多くはないだろう。日本のミュージアムの特徴としてよくいわれるように、企画展示を目的に訪れて、その展示だけを見て終わることも多いのではないか。しかし今回、ジェンダー史の視点からみる、という明確な意図をもって、歴博に限らずある館の常設展示をみることは、展示対象の時代や地域に関わらず、歴史的なものの見方や、歴史資料を「みる」ことの意味を改めて問い直す経験になるということを教えられた。

本共同研究では、ジェンダー史の企画展示をも視野に入れているが、単に企画展としてジェンダー史を扱うだけでなく、将来的に総合展示にもジェンダーの視点を導入するひとつの手がかりとなればと、個人的には期待をよせている。それは、大上段に構えて展示全体の流れを左右するといったことではなく、ひとつひとつの展示にちょっとした工夫を施すことで十分に可能となるのではないかと思う。この共同研究そのものにおいても、メンバーにはジェンダー史を専門としない研究者が少なからず含まれていることの意味は、それぞれの専門分野の研究にジェンダー史の視点を取り入れることで、よりインクルーシブな歴史像を描けるようになることが期待されているということであろう。それと同じようなことが、将来的に常設展示（歴博に限らず）においても何らかの形で実現できればよいのではないか。美術館展示における視覚表現や表象文化についての研究は、欧米中心ではあるがジェンダー論の研究蓄積の多い部分でもあるので、展示に生かせる実践的な知見も多く含まれているのではないかと思う。

もうひとつ、今回細かい改変を積み重ねた古代の総合展示を見て改めて感じたことは、展示が依拠している研究成果について、「日付のある判断」として、何らかの形で示しておいていただけるとありがたいということである。これはジェンダー的視点のみに関わることではないのだが、それがいつの時点で作られた展示なのかという情報は、その展示をみる上で重要な情報である。なんらかの工夫によって、歴史像は研究がすすむと書き換えられていくものであり、それにもなって展示も変わるものなのだとすることが観覧者に伝われば、固定概念から自由になれる歴史研究のおもしろさへの理解も深まるのではないだろうか。ジェンダー史の醍醐味のひとつは、既成の価値観や固定概念がくつがえされることにあると思うので、その点でもジェンダー史の視点を展示に取り入れることは新鮮な効果を生むのではないだろうか。展示の背景を説明する実践として、歴博のウェブサイトでは、企画展示の紹介ページに企画担当者による展示趣旨の説明が掲載されており、展示の意図が明確に示されている。これは、他館にも広がってほしい手法だとかねてより思っている。近年、博物館のバックヤードや学芸員業務の日常をあえて見せ、博物館活動全体への理解を深めてもらうことを企図した展覧会が増えてきているようであるが（例：栃木県立美術館企画展「学芸員を展示する」、秋田県立博物館「博物館の舞台裏で」、いずれも2016年）、上に述べたような展示そのものと直接関わるバックグラウンドの情報を豊富に提供するような博物

館展示にも、可能性はあるのではないだろうか。そんなことをあれこれと考えつつ、共同研究のメンバーとしては、何らかの形でこの共同研究に貢献できるように、まずは自分自身の研究の地歩を固める必要を痛感しているところである。

廣川和花（専修大学文学部）

次回研究会日程

2016年9月24日（土）－25日（日）

於：国立歴史民俗博物館 第1会議室

国立歴史民俗博物館基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」
ニューズレター vol.01
2016.7.1.発行



〒285-8502

千葉県佐倉市城内町 117 国立歴史民俗博物館内 横山研究室
基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」事務局

MAIL:gender@rekihaku.ac.jp